

2
19-2
4
島芳
下

竹島考 目錄

下卷

竹島通舶發端

大谷村川輸 椅櫈樹 于幕府

大谷之船漂到 朝鮮國

朝鮮人初渡來竹島

大谷之船人拿來 朝鮮人

大谷九右衛門出府



10.3.1

幕府禁過渡海于竹島

朝鮮國通使舶于本藩

幕府鑿竹島之地理來盤

雲州松江之士得奇南木

拔木多寄伯善邊海

竹島考下卷

因府

岳良

編集

○竹島通舶發端

元和中伯善國ヨリ竹島へ渡海セル。濫觴。夕尋
丸。又慶長ノ比中村伯善守殿領主。夕リ。又時松
ヨリ木子ノ城下ニ大谷喜吉。村川市兵衛ト云
ル。船長アリ。或時船ヲ竹島ヘ寄。美物産多キ。
ヨリ伺察。其海路ヲ詳ニシ。連々通舶セントラ
難思企。何サ。孤遠タ。絶嶋也。朝鮮國へ逼
セル。又。自己ノ計。三元通相成。時。竹島モ有ント。テ
數シク年月ヲ。遺居ケル。燐テ。至。燐キ。元和三年
松平新太郎。光政公播州姫路ヲ轉テ。因伯丙。別

ラ領ノ鳥取城ニ移リ給ヒケル是ヨリ先中村
伯耆守殿ハ卒去セラレ嗣子無タ一跡断絶
此時ニ備ニ伯耆國ヘハ采子城ニ加藤左衛門
尉殿領黒坂城ニ關長門守殿領五代橋市
擣下總守殿領一國ノ内ヲ分領セラレケル
ガ今度轉封ノ台命アリテ各退國セラレ依
幕府ヨリ檢査ノ爲阿部四郎五郎殿ヲ伯
許セラレ十巴永ク本邦ノ屬地ト相成ベキ
部氏ニ憑テ竹島渡海ノ事相續ニ唯今ヨレラ免
大谷村川山大ニ歎喜シ阿部
趣縣ニ訴申ナレバ堅クコレヲ領掌メ帰府セ
ラレケル其翌年彼西及ヲ幕府女被召出
事人休籍を被遂御穿鑿上大守光政公へ政光
中連署ラ以今度伯翁承子之任民大谷村川ヘ
竹島渡海之免許被仰出旨被仰渡シカ
急ギ堅船ヲ整ヒ壯夫ヲ選レテ其年直ニ渡海
シソケル固ヨリ幕府ノ蒙御直命也且の
用シ漁業ヲ營モ今ニ傳來^{ノ其事}積帰リテ互市交易ヲ成シ
ルニ利潤美太ナリケレ^件幾年シ不歷ノ豪
富下相成リ是四年目ニハ西家ノ内隔番ニ
開東へ赴キ彼島ノ大藪ヲ籠ニソ是ラ大樹
家ヘ捧ゲ辞謁セルト彼等が家ノ定規ト成レ
リテ其節ニハ政光並御役^人一ノ獻上御残

ラ持參セルキハ西謁セアルモアリ左ナキ
ニ於ハ直宛ノ書翰ラ以被謝之カル由繙ノ
者ナレバ其聲譽隱レ無リケリ其後御巡
檢螺木子ヲ經過セアルキハイツエ大谷村
川ラ族館ニ呼テ竹島ノ事体ヲ詳統包是ラ紙
面ニ認メサセテ取帰ル、了定例ニト云へり成
タグ繙敷ハ彼等が家ノ傳記ニ見エ文リ

○大谷村川輸稱檀樹ニ幕府
寛永十五年カリ成シガ江戸西之御九月終
造アリタ兼テ大谷村川ヘ金メ竹島稱檀可差
立トノ旨ナリシカバ件ノ兩人奉畏急キ竹島
ヘ渡海シ境内ラ探索ノ良材シ剪採ウヨレシ

積歸リテ兩人ノ者附添早速幕府ヘ轉輸シ
此度ノ御用向善十ク相勤ケルサデ彼竹島ニ産
スル稱檀樹ト云ルハ尋常ノ材トハ異ニ又葉
ノ色紫黒ナリ實ハタシノ如ク其色白シ
トエリ此珍樹ヲ以テ御書院ノ御床ノ板ニ用
シトサリ斯ル遠物ノ自在ニ集リ又ルモ全ク
寰宇廓清ト可謂フ

○大谷之船漂到朝鮮國
寛文六年ハ竹島渡海大谷九右衛門ガ年番ニ
テ拾三反帆ノ船二艘ラ整ヒ年代次郎兵衛ト
云者ヲ上乗トシ彼此五拾人乘組之同年二月

三同日未子ラ發船シテ其日雲列雲津ニ到岸シテ
ラ繫留風使ラ待テ四月六日纜ヲ解キ同八日
竹島ヘ着岸シ例歳ノ如ク海楓ヲ言ミ工西等
ハ停泊山^{アヒテ}木ヲ剪リ板ニ挽テ新ニ捨五反帆ノ船ヲ造
リ積置^{アヒテ}タル荷物ヲ三艘ノ船ニ載テ上乗次節
兵衛並未子ノ船子格二人ニ隱岐國ノ水夫九
人都合止一人件ノ新造船ニ乗組回車セ月旦
四日午時端然トノ惡風起リ狂濤奔突メ二艘
ノ船ハ忽^{アヒテ}帆影モ見工大成ニケリサテ次郎兵
衛ガ乘組ノ船ハ特運ニ伍セテ漂蕩シテ居外
リケルガ種々ノ危難シ歷テ五日ノニ二東ノ地
連漂子ニテ未子ニテ解放レケレバ船中ノ者凡今ハ無詮方激浪
躍入り命限リニ鳴崎ニ游ギ上リ其地ノ様
ハ不知氏聲々ニ喚叶ケレバ此物音ヲ聞ツ
帰リ粥ナドラ煮テ給ナセイト^{アヒテ}鮒ニ三拾人バカリ出来リ
之由ニテ官府ヘ報告セテ二十軒バ朝鮮國ノ内子ヤンギリキテ速事
屬官也。ヤ騎馬ニテ馳向ヒ近郷ヨリ人夫三
百人バカリラ發シ破船ノ流荷並船臭等ノ物

船止水路自東而西由長驛甘浦長驛木一兵ナテ此
地ニ暫逗留シケルニ毎度美酒佳肴或以薰子
ナドヲ饗應セラヒ其貯情之シカ無シ十月四
日三至テ東葉ヲ起程シサストウト云所ニ着
ス此地ハ釜山浦ノ内ナリ先ニ予ヤンギリニ
テ取上タル積荷ニ串繩六拾連ミ子ノ皮三百
五拾張同油七拾樽桟木九株撤^{他日可乞}延尺三間ナル
七株^{上字性不造}壹株^{他日可乞}格^{他日可乞}並破損在船脣ニテ
驛ラ重テ悉^ト送届タリ此時對馬侯ヨリ當國
釜山浦ノ陣屋^{代ヨリ}出張ノ役^{アリ}對馬侯ヘ被詰
置頭役^タ二位孫右衛門^ト云漂民次郎兵衛ヲ
喰出^ミ漂流ノ始末並^ニ船人等ガ名前年齢生國
京門ニテ明細ニ遂吟味ナ^テ申ケルニハ今度

近々悉く取上ナセ一々ニ遂黙檢漂人等一ハ酒
肴切麥十ドラ惠ミテ立帰ケル同十一日官府
ヘ併ハレ同十五日此地ヲ起程シセケン村川谷
ニア家譜ニハセソシト云處ニ送至ル翌十六日
未詳其可否ト云所ニ到ルヨノ所ニ三日逗留入
此地ヨリ官人上下三拾余人ヲ發シ漂人ヲ護
送シ蔚山ト云所ニ到ルヨノ所ニ三日逗留入
去ル十一日キヤンギリヲ發セシヨリ行程五
傳馬ニテ送ラレニ日ハ水路ニテ乘船ナ
ラトテ渡渉及アマツ此間カ休泊ノ名忘失しテ不傳又
リアマツ千ヤンギリノ本享詳ナラズアマツ年家墓張
シテ此地入ノ之歟名安敷基ラアト云張馨等
シテ此地ノ姓名安敷基ラアト云張馨等
又クハ朝鮮平壤錄ニリハ千ヤマ朝鮮行
使シテ此地人ラノ之歟名安敷基ラアト云張馨等
シテ此地ノ姓名安敷基ラアト云張馨等
又吉公朝鮮行
使シテ此地名北峯轉山音十ル語中ル

ナヤレギリノ官府ヨリ運輸セル品々不殘送
リ遣ス可ヤ其方凡ガ心底ノ程無遠慮言上ス
可ト音之次郎兵衛謹テ答申ニハ此度對馬候並
朝鮮國ノ御厄介ニ相成候段イカバカリ恐入
可矣得バ何一ツ御届ケ不被下トテ聊モ遺恨ニ
ニハキヤシギリヨリ折角是ニデ送東シモノ
ノ成ハ悉ク大坂^表迄^トケ遣スベシト申ケルヲ
次郎兵衛固ク是ラ辞シケレ凡彼ヨリハ遠路
ラモ不憚送)來レル品々ラ當地ニ停滯セニ
ムルキハ其懇誠ラ空スルニ似タリ尤船脅才
ドハ取帰トニ無用ノ物ナレバ此所ニ留ム可
其外ノ品々ハ悉ク傳達ス可トノ議ニテ其日

ハ旅泊ヘゾ帰シケル察スルニ漂着セニ日ヨ
リ是迄ノ間ハ萬端朝鮮國ノ扶助ナリケルガ
今日ヨリ對列候ノ賄ニ相成文ル様ニ覺ルト
ゾ其ヨリ後ハ^絶帰國ノ涉込モ無^ト徒ニ日數ラ
送^トケル内日本ヨリノ迎駕ハ病着津セル由
告ル者アリテ其事情察シ難ク皆嵌緒ラ含ミ
譯者ニ遇テ東萊ノ官府ヘ歎訴ニ及ケルニハ
戒寧^恩リ先ニ貴邦ヘ流著セシ日ヨリ淺カラタ
御^恩リ先達着舶セシ由仄ニ承候此餘ハ一日
ニ早ク帰國シ免シ給^ト十巴冥加至極遼^有力
ラント云シケレバ官府コレヨ同テ汝等ガ
講處モナリ去ガラ嘗テ王都並對馬ノ島主

ヘ書札ラ遺矣間ソノ消息ヲ得サレバ其義難
叶コノ故ラ得ルモ竊早速クハ候ニシ今暫ク
心ラ静ムテ相待候ヘト慰諭シケル漂人氏ハ
詮方ナク徒ニ莫日ノ至ルヲ相待ケル此時釜
山浦ヨリ王都ニテ何程隔リツルヤト同ケル
ニ二十日路アリト語ケルサテ十月四日ニ及シ
テ帰國免許セラルノ由_前テ官府ヨリ白茶
格四俵三外ラ入斗千轉百三拾枚酒二十瓶_{壹升}
哈ラ味噌壹壺_{半斗五升}音物トノ賜又對明
候ノ陣屋ヨリモ精米味噌豆油醋酒着_少中
ヘ給_セ翌五日士格ノ役人某漂民ラ領護シ
釜山浦ラ開洋シ六日ニハ對馬國_之轉ケ浦ニ着
岸シ同九日コノ島ノ城下府中ニ至リ翌十日

一朝鮮國ヨリ贈レル音物ノ目録 二通

漂倭處別贈

頭倭一人

白茶貳斗

白紙貳卷

從倭二十名

丙午九月日

巡察使

漂倭二十二人

白木拾肆石拾斗
大口魚壹百拾尾
清酒貳拾貳瓶
東芥貳拾貳塊
生鮮貳拾貳束
甘將酉陸斗 陸升
際

丙午十月日

朱

右ニ牧氏堅紙ニ丁薄様ノ車キ標ナル紙

ニハ彼處ニ呼出サレ猶又漂流ノ始末ヲ記向ラ
遂ラレ其後久因道ト云所ノ禪刹ニ宿留シ日
々一汁三菜ノ譽碑シ賜之重役ノ人未リ
テ漂民ヲ慰撫シ毎度酒者ヲ惠毛ケリバ餘り
取扱ノ厚キフラ却テ迷惑セント之程ナク其
年モ暮テ明レハ寛文七年トゾ成ニナル二月
ニモ拘成テレバ帰郷シ免ル、トノ爰ニテ領
主ヨリ酒貳樽落臺舟者一舟ヲ賜リ平田源五
郎ト云ヘル士ヲ漂護送ノ使者ニ命ゼラレ同
景三十久浪華ニ着津シ平田源五郎ハ直ニ漂
民ラ引領シ中ノ鳴ナル 御當家ノ御ヤシキ
ヘ參フ御役人ニ面謁シ廿一人ノ漂民毛ヲ送

通ケタノシトセ

漂民之牛國名前年數并役分

伯耆國

上乘 次郎兵衛

辛
武五文

船頭 太郎右衛門

武六文

鉄炮手

人兵衛

四拾文

同

又右衛門

二拾五文

鍛治

与三右衛門

四拾ニ文

同

太郎右衛門

武七文

隱岐國

雙突

小作

武六文

同

五郎作

武二文

伯耆國

船大工 長兵衛

武八文

同

十兵衛

武二文

同

作兵衛

武九文

同

作助

十九文

同

次良左衛門

五十四文

同

治兵衛

武七文

同

角耶

武二文

同

甚七

四十文

同

九赤耶

武九文

同

五郎

四十文

同

彦八

三十文

都合貳拾壹人

本書ニ此餘宗門寺號ヲ載ス今斯ニ略ス

○大谷村川捧由緒書于幕府
天和四年ノツ成ルガ幕府海内日令シテ
東照宮ヨリ以來御感狀並御龜美ナド賜、裏泉
第ノ者ハ是ヲ可書上旨普ノ被觸仰シカバ伯
卷國永子ノ住民大谷村川市兵衛少ハ町人ノ
令際ナレ氏世ニ聞ニアハ家筋ノ者ナレバ由
諸書ヲ差出シケル

覓

一私共竹嶋江渡海仕候矣

松平新太郎様因幡伯春御領知之時分
元和三年伯春國御仕置之爲
御使阿部四郎五郎様御越被成候時分
私共親御訴訟申上翌年御江戸江相
詰御證儀之上

新太郎様立 御奉書被遣之從
新太郎様其 御奉書私共又載仕蓬有
代々所持仕候夫ヨリ隔歳ニ兩人ニテ渡
海仕候就夫八九年之内壹人死罷越
御代々様 御目見被爲 仰付候延
宝九年酉七月當

御代様江戸村川市兵衛
御目見申上候以上

村川市兵衛

天和四年

子ノ二月廿日

大谷九右衛門

今按上ノ文壹人死ノ下御江戸江ノ四
字脱スル欵又梅ニ此記ニ據庚ハ八九
年目ニ一人死出府セシガ如ク見工然
氏四年目ニ出府シタルヲ無相違トニ
思ハル斯ニ推量ヲ加ルニ一家ノ譜ヲ
見片ハ八九年ニ相當ベキ狹若クハ往
歲ハ斯アリテ後歲四年目ニ隔番ニ出
府セルフニ政リタルヲニヤ後日可紀也

一言德院君ノ御代元和四年政先ヨリ
松平斉太郎光政公へ賜フ處ノ御奉書
ノ文加尤

一從伯者國糸子竹島江先年船
相渡之由候然者如其今度致
渡海度之段糸子町人村川市
兵衛大谷亮吉申上付而達

上聞候处不可有異儀之旨被

仰出候回被得其意渡海之儀

可被 仰付候恐惶謹言

五月十六日 永井信濃守 在判

升上主計頭 在判

土井大炊頭 在判

酒井雅樂頭 在判

松平新太郎殿

人々中

○朝鮮人初渡來竹島

元祿五年八月島ノ渡海村川_{カヤハケ}年番十リシガバ
例年ノ如ク船ヲ仕立テ同舩亡一人二月十
一日未子ヲ出帆シ隱岐嶋後ノ福浦ニ着岸シ
暫ク斯ニ滞船シテ三月亡四日順風ニ帆ヲ開
キ同廿六日辰刻竹島ノ内伊賀嶋ト云小峰ニ
船ヲ繫留本嶋ノ体ヲ望察スルニ不審シキノ
アリテレバ船中一同ニ疑念ヲ生モ議論區ニ
シテ不決必其夜ハ此舟ニ船ヲ泊シ翌朝ニ及
テ所詮竹島ヘ着岸メ其上決済ス可トタ纏リ解
船_{カヤ}發_{ハセ}浜田浦ヲ指テ漕近ケルニ累ノ異船ニ艘_{カヤ}二艘
海邊ニ見エナルガ一艘ハ居船一艘浮船ニテ

三十人バカリ乗組ミ此方ノ船ヲ目指タル駄
ニテ乘近ヅケルガ今ハ間合セハ間ニ可追
タル前ニ云大坂浦ノ方ヘ乗通リ又異国人
貳人演手ヘ相見エケルガ是ニ小舟ヲ下シテ
北方ノ船近ク乘過ケル故彼舟ヲ呼對件ノ面
渡來セリヤト尋ケルニ其内ノ一人ハ譯者ニ
テ答ケル様ハ戎等凡ハ朝鮮國ノ内力ワテニ
カワグ詳文北地未ノ者也ト云此方ノ船人凡ノ申
ニハ元来ユノ竹島ハ大日本國ノ將軍ヨリ
銘々凡舞領ノ舊年渡セル島之然ニ游ガ如キ
毛唐人凡櫻リニ渡來致シ漁業ヲ妨ルノ段前
代未聞不届ノ至ナリ一尉ニ早ク立去ヘシト
呵禁シケレバ譯者陳シ申ニハ是ヨリ北大薈
リテ一ノ小島アリ吾國主我等ニ命ス二年ニ
一度ツノ彼島ニ渡海ソ蘆ヲ捕テ奉ルノ恒例
ナリ當春モ渡海セントテ二月止一日數拾艘
ニテ本国ヲ開洋シケル必渡中ニテ風漂ニ逢
ヒ其内五艘ノ乗組都合五拾三人三月止三日
山ニ見工ケレハ羣ノアト心ニ悦ヒ今ニ滞舶
シテ漁業ヲ成ケルニ尤難海ノ箭船ニ破
損シケレバ終覆ヲ加ヘ成就セル上ハ早速ニ
帰舶スベシ御邊達ノ日船モ疾々着岸アラレ
ヨト無餘義歟ニ申ケレ凡衆寡不敵アレ
船中一同疑念シ挾ミ船ヲハ此所ニ碇ヲ下

シ 船人ノ内若干 小舟ニ乘テ掲陸シ境界ヲ彼
方此方ト圓歷シケルニ去秋此方ヨリ敵乞ニ
圍置タル獵船八艘並漁獵ノ具ナドスキト紛
失シケレバ此等ノ物ハ如何相成ヌルヤト件
ノ譯者ニ責問シケレバ唐人答申ニハ我等ガ
輩浦乞ニ乘廻シ漁獵ニ用ヒ居ケルく何様着
岸アツテ上陸セラレヨト漫語ヲ以テ勧メ申
ケレ元其情實ノ程難計致テ其意ニ不隨サテ
件ノ唐人ワバ西人瓦上陸咸シノ後證人為ニ
トテ渠等ガ製置タル串纓收シ並笠一蓋網頭
中一箇味噌麌一塊ヲ取テ同申冠碇ヲ起レ四
月朔日石見國濱田浦ヘ着航シ同四日雲霧雲
津ヘ到舶シ翌五日_申采子ヘ歸岸セシト又敵

老ノ傳說曰コノ時此方ノ船人氏事ヲ和順ニ
計り俱ニ舟務ラ成シムル庶ハ永ノ通舶相成
ベキヲ成ニ彼等ガ恩虧淺シテ時第ラモ不辨
後來ヲ懲シメシトテ理不盡ニ譴責セシ故彼
ト憤怨ラ捕シテ後ニハ此方ノ船隻ラ拒擊セ
ルニ至レリト云々此說尤當レリ但是說ハ全
着以後ノ分別ト見エシカ萬事先決_ハ加ニハ的牛小糞サ一終

○大谷之僉人拿帰朝鮮人

元祿六年ハ大谷九右衛門が年番ニテ船ヲ竹
島ヘ遣シケルニ黒兵衛平兵衛_ト云者兩人ヲ
船頭トシ二月十五日同船立一人采子表ヲ發
船_ス十七日ノ黎明ニ雲列雲津ヘ到岸シ滯船
數日ヲ亘り三月二日順風ニ依テ纜ヲ解キ同

日隱岐國鳴前ハシ村へ着船シ同十日鳴後才
福浦へ到船シ同十六日便風ヲ得テ帆ヲ開キ
翌十七日未冠竹島ヘ着帆致ケル當年も朝
鮮人反渡來セル程モ難計依之直ニ濱田浦へ
ハ着帆セズノ唐船ガ崎ヘ船ヲ繫留先本島ヘ
人ラ出テ徘徊窺覗ヒシムルニ襲茅ノ葉餘程
干置久^ク旦^のの邊^ヲ破タル草鞋ノ脱捨夕^ニ
飛春ニ本邦ノモノニ不似サレハ朝鮮人ノ吾
ヨリ先ダツテ渡來セルト無疑^タイカハ
船セント議論時シ移シケル^{シテ}單^シ晚景^シ
及ビケレバ其儘一夜^{シテ}明シ翌朝ニ至船頭黒
矣衛平兵衛西人八壯夫五人シ伴ヒ都合七人
脚舟ニ載^シ先西ノ浦ヲ搜尋スルニ何人不審
シキ財^ヲ無リケレバ舟ラ北浦ニ潛^シ回シケル
シ客子ヲ窺視ニ假敵ノ内ニ唐人一人居合セ
獲^シ芳人葉ラ仰山ニ捕上居ケレバ其仔細イカ
ニト向シノケルニ言語一向ニ通ゼズ依之彼
ル故真所へ来近ヅケルニ其中ヘ譯者アリ
テ渠ト他以^テ壹人ノ唐人トラ此方ノ船ニ乘^シ
テ島ハ荒磯ナレバ風潮ノ變難計急ギ帆帰リ
シ^テ兩人ノ黑客ヲ李船ニ移シ此度渡來セル仔
シ^テ諸向^シタルニ譯者^ヲ申^シ云吾在所ハ朝鮮國慶

尚道東萊縣ノ者ニテアソン。ビンシヤウシヤン
此語姓慶ニアレ。彼國ニ人安ル姓俱
實ニ時ノ異名可歎又ヘシヤウヒンヤウシヤウシヤン
無筆十始終筆硯ナラ未詳實ハ名ナル輝將
年齡四十三歲十日是ナル者ハ蔚山ノ人ニ
テトテヘリ云ヘリ年齡四十歲十日當春三
加誤シヤクハシ徐案ニ三界ト云地詳ナラ三界同
セテハ上官ニヤスシヨリ獲捕テ奉レト下
シカ元去バ何レノ嶋ヘ渡海已ヨト
者ニ差圖ハ無之候得喪去立コノ島ヘ流着セル
シヤクハシ徐案ニ三月七日釜山浦ヲ出帆シ同夜
海スベシト三月七日釜山浦ヲ出帆シ同夜
セシ由ニ答フ又類船ハ何程渡來セルヤト
三艘ノ内格七人乘ニ格五人乘我等ガ乗組ノ
中三船ハ拾人ニテ都合四拾二人着帆セリ在
井イワソニン東京ち云者ナリ十答フ船中人
者凡相議シケルニハ昨年入朝鮮人氏ヘ再渡
來致ニシキ旨急度戒置ケル處又矣當春モ秋
等ニ先父ツテ着岸致シ所務ヲ妨ヘルノ段言
語道断ナリ真儘ニ捨置ナバ遂ニ彼等が屬三
掠奪セテレンフ必然ナリ亦詮コノ兩人ヲ連
帰リ事ノ由備ニ遂言上幕府ノ御裁定ヲ仰
シ同立日隱岐國鳴後ノ福浦ヘ着岸致シ矣处
日雲初候ノ官解ヨリ早速船頭ヲ呼出シ此度

朝鮮人ヲ押テ誘引セル始末矣シト遂吟味事
由紙面ニ書記シヨロリ可差出トノ下知ナリ
シカニ船頭ノ申ニハ朝鮮人取此船中ニ居合
候上ハ彼等ヲ御詮議下サル可ト陳シケレ
バ去ハ異客ヲ連參レトテ其地里官主合ニテ
是ヲ糺向シ口書ヲ認大谷ガ船頭ニモ其端
ニ印形ヲ河押トアリシカニ此後ハ回ク断り
テ致カリケルトゾサテ事終テ後官属ヨリ異
客ヘ酒肴ヲ贈リケル同日三日福浦ヲ出帆タ
鳴前ヘ到岸シ同日六日此舟ヲ發船シテ雲列
長濱ニ着舶シ翌日未冠朱子ニ帰岸シサ
テ異客ヲハ灘町大谷九右衛門が毫ヘ入置羽
檄ヲ馳テ車馬由上啓シケレハ非常ノ殊事ナル

故朱子ノ領宇荒尾大和別家ノ伯父ナニ荒尾
從理急キ彼地ニ赴キ車馬猪名今遂吟味サテ事体太字
家ヨリ是幕府ヘ被仰達シカバ 関東ノ御沙
汰ヲ歴テ政老中ヨリ朝鮮人ヘハ以來竹島ヘ
渡海致ヅル様ニ急度申舍ノ肥前國長崎ニテ
送還スベキノ旨御裁定ナリ依定異客ヲバ
月九日朱子表大手本府ヘ可差出トノ御下知ニテ六
組也鹿野卿右衛門尾園忠兵衛洋服ヨレヲ衛
護シ並ニ永見治兵衛御醫師中村玄達ヲ被附
添七月朔日申魁善十ク荒尾大和宅ヘ參着ス
性強暴ナル者ノ由立テ其間工アリケレバ若

遂申ヨタ狼藉ノ奉勧アツテハ票カリナン
ア婦女幼児ノ道路ニ在テ見物スルヲ停止
セラル翌ニ日荒尾氏ヨリ黑客ラ町會所一歩
曳鐵鎗大柄ノ警衛以テ嚴重ナリ領テ起程
モ近ヅキケレ程山田兵左工門平井甚右衛門
ヘ黒客護送使節ヲ被命並御醫師竹向玄碩ノ
徒方五人輕卒小人若干其外脚力猝理人ニ
テエレラ附屬セラレ六月七日辰本府ヲ發程
日又兩人ノ異客ヲハ轄ニ乗テ陸路ヲ長崎
追送還セラレケル實ニ稀有、變事十
一

二人ノ朝鮮人股引ノ級セキ小キ牌ラ結付
居ケル故コレハ何ナルモノゾト尋ケレバ
アンビシシヤ咎ケルハ吾邦ニシテ此弊

無者ハ世間ノ交り難相成依テ銀四格同
ヅトノ運上ヲ出メ是ラ矣ルヲヒト語リ
テルトゾ

アシピシシヤ腰牌カイハイ表面

東
私済ト年三十三長四
業
主京屋吳忠秋

同裏面

庚
釜山佐自川一里
年
第十四虎三戸

トテヘ腰牌之表面

庚 青島島里

第十二仄

辛 五亥

庚

同裏面
三十丑

朴於山

於皿十

今按此牌面ノ文字恐クハ傳写ノ誤也ラシ
後日識者ニ可札ス

○大谷九右衛門出府
去程ニ元禄七年ハ大谷九右衛門ヨ出府入ベ

キ辛番ニ相值リテ其前年^{前々年}元竹鳴
ハ朝鮮人尼渡來ノ所務ラ妨ケタル故今般
大樹家ヘ獻進スベキ干蠶ニ事欠タ如何^ハ及
ニトキ奈顏ニ事ノ仔細上達ミ及ケバ
幕府^ノ大谷村川光^ハ四年^{子年}六一度ツハ出
勤役衆ヨリ大谷村川光^ハ四年^{子年}六一度ツハ出
府シ拜謁被仰付丁舊親ナル誠獻上物ノ有無
ニ不拘明年底可致出府候御差前其上御差圖アル
可トノ御汝达ニテ其旨太守家ヨリ大谷方
ヘ被仰濟ケル懸^シ九右衛門以雖有丁身ニ餘リ
翌年ハ急ギ旅旅ラ副ヒ江府ヘ赴ケルニ今度
ハ干鰐可差上トノ御下知ニテ左様ニ取計ヒ
三月廿八日拜謁東上ナ候ニ御役人方一毛収

御残リ屋至テ謁見ヲ遂ケ萬端其現西首
尾ヨク事濟大ニ開眉ノ退府セント之

○幕府禁過渡海于竹島

サテモ大谷村川ハ元祿五年ヨリ以來朝鮮人
為一本業ラ妨ラレ大ニ當惑ニ及ビ覆リニ
歎訴ラ捧ゲ幕府御下知ヲ讀同七年八年凡
船去竹島ヘ遣シケレニ朝鮮人吾ヨリ先テ渡
海之年々ニ人數ラ增加シ後ニハ此處ニ三十人
彼處ニ五拾人ト屯ラ橋ヘ守禦ノ備嚴重ニシ
若此方ノ船押テ着岸半ハ大事ニモ及半段分野
ナレバ無是非還船シ事ノ備ラ上啓シ一向無事
翌十九年幕府太守來ヘ仰也テ向後竹島

ヘ渡海スル又禁セラル可ノ旨被仰出此時
日賜リタル御奉書ノ文如瓦

先年松平新太郎内別伯物
領知之幕相伺之伯別名子
之町人村川市兵衛大谷甚
吉竹島ヘ渡海至于今雖發
漁候向後竹島ヘ渡海之制
禁可申有旨被仰付候
間可被存其趣候恐惶謹言

正月十八日

土屋相模守

戸田山城守在判

在判

阿部豊後守

大久保加賀守

在判

太守家跡名宛

國俗ノ口碑ニ云此時竹嶋ニ於テ朝鮮人氏此
旨ノ船ト見ルヨリ大鏡ヲ裏シ海岸迄ノ寄付
サリシト云リ云程ニ大谷村川ハ不圖モ
一齊靈命ノ地ニ離レ八拾年來ノ生業ヲ失ヒ
且ハ配下ノ船人等ガ困窮ヲ佛ミ當惑至極セ
依之村川市兵衛翁ハ同十一年ヨリ出府メ
獄訴ヲ捧ケ同十六年追六箇年カ同種乞キシ
謁シテ幕府ノ恩讐ヲ仰キレ元事滯滞メ
徒ニ年月ヲ累ル而已ナレバ永々ノ在府ニ家
貲貲ラ頃ク遂ニ困窮シテ其殿因邸へ上達シ
テ室シク退府セシト也其ヨリ後ハナシモ世
逼迫ニ及ケレバ大守家ヘモ是ヲ不便ニ被
恩召采子町ニテ綿向屋ヲ免許セラル昔ノ采
櫻ニハ似モヤラザレ丘僅ニ家名ヲ存メ世ヲ
活計シテ是ヲ召放レヌ彼兩家ハ格別ナル由ラ
テ町ニ居テ蘆ヲ取扱ヒ大谷藤之丞ハ瀧町居
テ鷺鳥ノ販賣ヲ成シ各僅ノ口銭ヲ利メ是ヲ
活計トセリ今ラ以テ前世ニ比スレバ淺後キ

有様ナリ斯ル由緒也家筋ノトモ同傳ル者ハ
稀ニノ自然ト同用ノ久ノ崇敬も薄シ成行昨
日ニテ西負擔ヲ業トセシ鄙夫ニテ元今日ノ
勢力ニ來ノ奢麗ヲ極ル者ヲ見テ却テ友コレラ貴
重セリ榮枯盛衰ハ天理ノ當然人事ノ定規ト
ハ申十ガラ落情ナリケルト云之

○朝鮮國通使船于本藩

元祿九年六月四日伯春國赤崎遭一朝鮮國ノ
船看船セル由及註進ノ其ヨリ前隱岐國ノ御
代官後藤角左衛門幾年代共ヨリ叛告セルニ
八五月廿日朝鮮船壹艘着岸せ其任細備ニ相
尋處年度彼國船三拾二艘竹島へ渡海ナル
ガ具内ノ壹艘伯春國ヘ訴訟ノ爲所日渡來セ
ルノ由申侍ル肯相達シ居レバ定テソノ船ナ
テ才ト御船半山崎立馬ヘ命アツタ急ギ彼地
鼻ヲ乘廻シ船礮ニテ礮ト行達タリ此處ハ船
繫リ難相成仰テ引船數艘ヲ出テ青谷ヘ漕戾
ノ内平井金左衛門ヲ被遣船客ニ對シ竹島
ノ被仰付青谷ヘ罷向安同知名也本邦同知
逐道實鄉李進士外一人ヲ專念寺へ請シ對談
ニ及テルニサウバ竹島ノ一爻ニ依テ使船ヲ

カヤナテ事由
成リ同八日ニ
辛人微人ヲ引シ
ヘ迎ヘラレ東
生一日驛馬也

昂右工門岡嶋
府ノ町會所へ
兵箭（兵器）被命（シカイシヨウ）
ノバ上陸致サ
相國之リミカバ
使舶ヲ列入テ
ニ唐人船屋ノ
聞工ケ也又故

蛇ラ巻ク
外ヨリ多ク
但シソノ

吉草義定の墨跡。右側は書道家としての筆であるが、左側は筆蹟である。
右側の文は「吉草義定 連喜の子也。是日之清
午後、林寺にて坐す。其ノ少年有
遊之使、一子を抱て、持て。幼
叶松、之子の抱き子不取。之子、之子
元也大抱き抱き子也。」左側の文は
先輩の足跡。足跡も如く、此の
事多々、子抱き抱き子抱き子也。此の
事解く。被持て。被持て。被持て。
修業の上也。
左側の文は「吉草義定 連喜の子也。是日之清
午後、林寺にて坐す。其ノ少年有
遊之使、一子を抱て、持て。幼
叶松、之子の抱き子不取。之子、之子
元也大抱き抱き子也。」左側の文は
先輩の足跡。足跡も如く、此の
事多々、子抱き抱き抱き子也。此の
事解く。被持て。被持て。被持て。
修業の上也。

國長崎又官廳有支敵真表々迴頭江其上ニテ申
願出可也。羨他ノ團々ニ於テ異國ノ願等取扱羨
義ハ政府ノ大禁ナレバ決テ龜相成旨隨分懲
申諭シ若不許容ノ躰相見差々直ニ帰航又ベ
キ旨可申渡ソノ内無累儀長崎ヘ帆ヲ開キナ
ハ此御方ノ御家来並對列候ノ御家来朝辭

通ゼシ氏明白セズソ止ニカヤサテ事由
羽檄ヲ以テ幕府ヘ御達ニ相成リ同八日ニ
ハ御普請奉行北村八兵衛ソノ年ノ役人ヲ引
領ノ赴^ヒ同十二日黒船ヲ加路ヘ迎ヘラレ東
善寺ヲ須臾ノ旅館トセラル同日傳馬九
足ラ被遣戸田市右工門牧野市郎右工門岡嶋
藤兵衛途中ヲ衛護シ黒客ラ本府ノ町會済ヘ
被差置遠留中隨地送致モ羽原傳五兵衛^ノ被命
近ラ被遣戸田市右工門牧野市郎右工門岡嶋
セズ其儘船ヘ可差置ノ吉御沙汰相應リシカバ
急ギ湖山ノ青嶋ニ飯巖ヲ營ミ使船ヲ列入テ
此舟ニ被繫置今此島ノ南岸ニ唐人船屋ノ
名残アルハ其時人舊蹤ナリト聞エテ此又故
老ノ說ニ曰朝鮮人元滯^キ間此鳴^ク蛇^ヲ悉^ク
捕尽シテ食ケレバ後年ニ至リ土鼠蕃殖シ田^ヲ
煙ヲ損害セ民人コレヲ患テ外ヨリ多ク
ラ捕來リ此鳴ヘ放テタ^{ハキラニ其害止メ}但シソノ
實否ヲ不知カテ其後從^ハ幕府重テ御下知有^之
之^ハ對馬侯ノ御家来一人通^ハ兩人御當地ヘ
被差遣^ハ同朝鮮人頼ノ筋^ヲ有^之更^ハ肥前
義^ハ政府ノ大禁ナレバ來テ難^ハ相成旨隨^分懲^ニ
申諭シ若不許容ノ躰相是差不直^ハ歸航スベ
キ旨可申渡ソノ内無異儀長崎ヘ帆ヲ開キナ
バ此御方ノ御家来並對列候ノ御家来朝鮮

船ニ附添還り可^ヤ矣旨被仰^ハ出ケルトゾ^ノ今此^{キヨ}
ラノ落着^{チヤク}詳^{ツヒテガ}ナテ^ス他日^{シテ}博古^{ハツコ}の君母^{ミカミ}ニ^{シテ}乱^{ハラハラ}メコレ
シテ充補^{シラフ}又因幡志^{イハラシ}ニ載^{ハシマ}ル如^シリ看^シニ事理^{ジリ}混淆^{ハラハラ}レ
ノ茶屋兵助^{チャヤエイサブ}が^{シテ}詐^{ハタ}ニ其時^{ヒトキ}ニ來^リシ黒舶^{クモハ}人^{ヒト}人員^{ヒン}
之記並^{アリ}船験^{ボウケン}ノ圖^{ドク}ヲ^{シテ}持セリ如^シ左^シ

三品堂上臣

安同知

金爲僧將釋氏

裨將

李^リ淡^{タム}

金^{キン}劉^{リュウ}

憲^{ケン}判^{バン}

帶^{タス}章^{カタカタ}

釋氏帶章僧

ユクワイ

律^ル習^ヒ淡^{タム}劉^{リュウ}金^{キン}李^リ淡^{タム}

化^カ主^シ漢^{カン}夫^フ格^{カタカタ}沙^サ江^{カタカタ}

ヱンニラリ

以上十一人

讀化主

起船尾見盛船
又飯古鄉恩農時

朝鮮國會監稅

朝鮮國會監稅

朝鮮國會監稅

○ 幕府精鑿行鳴之地理來歷

享保九年四月

幕府

太守家一佈

大谷村

川往歲

通船也竹島

朝鮮國

人竹島を渡來シ

テ亦勢

妨六月

渡海停止

三相成候始末並彼島ノ地理

物產等備

言上致十又可ノ旨命令アリシ

地理

力バ彼西家ノ者奉裏往

年竹島へ渡海セシ

能人ヲ

伯別ノ中二七人ナラテハ存在セ

又大谷裏毛ニ

及ンテ言談紛糾ニソ羅探者多シ或ハ遙

國内モ妄行シ羅者アリ其中ニ木子瀧町ニ居ケ

ル路三兵衛ト云者當辰ノ七拾二歳ニテ四拾

年以前一度彼島ヘ渡海セル者矣得バ漸々彼

宣人ヲ伴ニ本府ニ赴キ今度從幕府ヨリ御
穿鎧ノ條件レバ言上遂サセケル事其後刀
尋再三ニ及候處ガ式町ニ居ケル長右エ
門ト申者先ニ他所出ソ居合ガリシガ此程帰
來リ獨又籍クヨレラ質スニ此長右衛門未弱
年比渡海シケルハ元禄五年ニテ即朝鮮人
初テ竹島ヘ渡来セル年十リ其ヨリ引瀆キ三
年往返セル者ニテ當年五拾三歳ニ相成ナル
渠ガ親レク見及タル巨細追テ上達セシトニ
事ノ要ハ上巻ニ載レハ斯ニ略ス此時從幕
府竹島渡海再免モアラン故ト世評画ナリシ
ニエ遂ニ其事無止ニケリ

○雲州松江之士得奇南木
出雲國松江ノ城下ニ中村半兵衛ト云士ニアリ
或時隱岐國ヨリ積來レル薪ヲ買テ焚ケルニ
家内ハ勿論近隣ニテモ馥ミト薰ジ渡リケレ
ハ皆人奇異ノ思ラ生シ其本源ヲ尋テ中村宅
へ寄棲ヒケルガ疾ニ半兵衛ハ心付テユレラ
除置ソノ来レル者凡ヘ示シケルニ膺方ナキ
家上ノ奇南木アリ時許ニ日隱岐國ニハ和產
ハ往昔ヨリ其間アル可ニ又ツノ以後トテ
モ如此涉达アルヲ不聞ワノ比松江ニテ件
ノ香木ラ半兵衛奇南木ト号メ時人モテハヤ

シヌルトハ隠ナキアニ隱岐ハ離レタル鳴国
ナレバ蠻國ヨリ漂來レルモノラ浦人ソレト
不知シ薪ト一舟ニ東テ船ニ積來リシモノ可
成ト云云委クハ上野忠親ガ著セル雪窓夜話
ニ見エタリ今ソノ時代ヲ推ニ元文前後ノ事
欲前ニ載ルガ如ク竹嶋ヘ渡海セル船人等毎
朝河邊ニ出テ面ヲ津ノ喰グ片何地ヨリ元無
ク荒キ風吹來レルト云ルハ若クハ彼島ニ此
奇南木ヲ産スルモノニヤ旦隱岐ト竹島トハ
海路モ甚遠カテザレバ妄推ニ近シト雖萬一
彼島ヨリ漂ヒ來レルモノナリシ故ト新ニ附
添ス

○拔木多寄伯一翁邊海
室曆七年ノ事ナリシガ伯翁汎入郡御厨人灘
邊ニ何地ヨリ乞不知拔木夥シク潮汐ニ漂テ
寄来リケレバ其地ノ役人近郷ノ人夫ヲ發レ
コレヲ取上サセ其由ヨ本府ヘ走報セニカバ
早々御役人ヲ遣遣點檢ヲ遂ラル、廻悉ク本
邦ニテハ見エ不及珍異ノ良材ナリ時評ニ日
西土洪水シテ山崩レ拔木波濤ニ浮ヒ風ニ漂
テ寄東ルモノナテソト云ヘリ後漢ノ元初中勃
海大風拔樹二萬餘株ト云く此度モ斯ル變異
ニ依テ然シムルモノニア懸ル處ニ折カラ其
前年、冬治容子河岸林大茅頭廢ノ第ヨリ出

火シ因邸回禄ニ罹リ夕レハ其比専ハテ出納
ノ事ヲ委任セラレ今ニ良寧ノ名譽ヲ傳フル
安田七左衛門ガ調略ニ依テ此珍戦ヲ巨艦ニ艘
ニ積テ江府ニ漕運シコレヲ船場ヨリ治容子
河岸ノ第へ連日運輸シケレバ流石敏華地ト云
錮稀代ノ勝事ナレバ普ク東都ニ流傳シ事成
就ノ上世ニ是ヲ因列候ノ唐木ノ御殿ト云
ハヤセシトカヤ全ク彼異教ヲ以テ建營アリ
シガ故ナリ又同時ニ造建アリ
シ御門ヲ誰名ヅクルトシモ無レ凡時人拳テ
日暮御門美称セシモノ口ニ嗜灸セル
处ナリ其由來イカニト尋ルニ此時ノ營作ハ
彫刻巧ラ極シ玉ラ磨キ金ラ鑄シ奢美ラ逞フ
セルニハ非ノ自然ニ程位規ニ力ナヒ其狂ヒ
魏乞然トシテ何ナル良工ガ看覽又トモ聊モ
雍ズベラモ見エザル至妙ノ奇觀ナレバ道ラ
行カウ人々ニシバシトテヨツ立留リケレ謗
ニ不厭時刻ラ移セル内ハヤ日ノ暮ルラモ忘
ムルト云毫ニ擬メ斯ハ縛號シケルトゾ此時
ニ值テ不圖領海ニ孫樹寄束ノ又不來ニ世ノ
聲譽アルヲ偏ニ天ノ瑞應ニメ稀代ノ盛事下
可謂同九年二月芝ノ御別業ヨリ御徒移アリ
テ同治一年將軍宣下ノ節祝賀ニ依テ
大樹家御招請ノ節儀式行ハレ具後又太守
家御住官ノ御招請アリテ様ノ節大禮事闕ナ
ク賤之シク取行持上ケルガ祝融ノ災免レ難

可替僅十餘年ラ歷テ明和九年二月廿九日
目黒行人坂ヨリ火起サシモ名ヲ得大慶高屋
モ一時ニ灰燼トゾ成ニケル想ニ因伯ノ沿海
ニハ今モ竹島葛籠漂ヒ東レルラ以テ考ルニ
件ノ抜木モ若クハ彼島ノ境界山崩シテ伯巻
國ノ邊近ヘ寄来レルニ知ベカラズ附會ノ讖
上雖卷尾贊ス

竹島考下巻 大尾

自跋

當府下舊家多シ是以遺錄傳記甚シト
セズ雖然年序ヲ經ニ從ヒ回禄ノ災ニ罹リ
或ハ蟲鼠ニ損害セラレ又懶惰ナル人ニ至
テハ是シ無用ノモノト成シテ潛ニ屏風十
ドニ殆沒シ稍キ走シキニ至ヌルト尤可惜
ニアラズヤ弔夙歲ノ比ヨリ心力ヲ竭シ雖
搜求之唯恨ラクハ人を出入ノ勞ラ厭ヒ或
ハ家事ノ他ニ泄ナシソラ憚リ有丘無キガ
加クスル者アツテ今弔ガ閑観セルモノ未
ナガニ不至苟モ同好ノ人此書ニ舉ベキ

事實ヲ得アラバ是ヲ充補セリト素ヨリ
予ガ懇願スル處也ト云爾

2
2
19-2

